



「霊における会話」についてと祈り

「このシノドスとはシノダリティについてのものであり、他のあれこれのテーマについてではありません。……重要なのは、考察する方法、つまりシノドス的方法です」。

(教皇フランシスコ)

A) 始める前のところがまえと準備

[[「霊における会話」は] 第1 ステップ、第2 ステップ、第3 ステップとありますが、そのときの状況等に応じて、いろいろ適応していくことも勧められています

(『討議要綱』41 項)。

目的を明確にする

どんな理由で「霊における会話」を行うかを、グループのメンバーに前もって伝える必要があります。特に何かを決定しなければならないような場合、ともに見極めることが大切となります。「みんなで一緒に祈って、考えましょう」という呼びかけは参加者一人ひとりのところに聖霊の働きを促す言葉となります。

責任の所在をはっきりとさせる。

「霊における会話」を実行した後で、最終的には誰がその審議・決定を行うのかを事前にグループのメンバーで話し合う、あるいはメンバーに伝えることは欠かせない準備となります。

すなわち、決定が必要のある内容について小教区共同体、信仰の共同体で「霊における会話」をおこなう場合には最終決定者が誰か（グループのメンバー、あるいは、そこでの合意事項をもとに検討する別の委員会など）を事前に明らかにすることは必要です。



グループの意見が反映されるように

最終決定者が「霊における会話」のグループではない場合、「霊における会話」において出された合意事項を最大限に尊重されることが保証されているのは、非常に重要です。

あきらめないところ

「霊における会話」のグループが審議・決定をおこなう場合は、一度きりの「霊における会話」でなく、時間をおき、何度か「霊における会話」をおこなうことが勧められています。それは、話し合った内容を再度祈りのうちに思い巡らし、そこから得られた光を新たに差し出すことによって、よりすべての人が納得のいく合意に達することができるようになるためです。

信頼とゆだねるところ

また最終的な合意の際に、真っ向から対立する意見があるような場合、審議・決断する人たちは、対立意見があることを充分理解した上で、決断することが求められます。グループのメンバーも、決断する人たちを信頼しながらゆだねることも重要です。この意味では、疑いのところではなく、「霊」の導きにこころを開かせてもらえるような、信頼できる雰囲気づくりは必要になるでしょう。

B) 「霊における会話」の実際

個人の準備

与えられたテーマについて、個人的に祈ることから始まります。具体的には、聖霊の導きを願いながら、グループのメンバーそれぞれが深めるように呼ばれている問いに対して自分の答えを準備します。



グループの準備

グループは「霊における会話」が始まる前に祈るよう勧められます。この祈りはグループで行う沈黙の祈りです。これから話し合うテーマについて、また、今ここに聖霊の恵みがよく働くようにと願って数分間、沈黙のうちに祈ります。グループによる沈黙は、メンバー一人ひとりの結びつきを豊かなものとしします。

メモを用意して

沈黙の祈りをした後に、第 1 ステップを始めますが、集中して相手の話を聞くため、また制限時間内に分かち合うことができるように、自分が分かち合う内容を事前にメモしておくことが大いに勧められます。

沈黙、祈り、みことば

最初に、沈黙の祈りと、聖書の言葉を朗読して耳を傾けることは大いに勧められます

第 1 ステップ：「わたし (I)」

発言し、聞く：第 1 ステップは、メンバーの一人ひとりが祈りのうちに得られたことを分かち合い、その発言をグループにいる一人ひとりが注意深く聞くことに専念する時です。

敬意：聞き取れない言葉について質問することはできますが、相手の語った内容についてコメントしたり、自分なりの賛否を述べたりしてはなりません。一人ひとりが語っていることに敬意を示しながら、言葉一つひとつを受けとめることが求められます。

ここに刻む：各自もしくは数名が分かち合ったのち、その内容をメンバー一人ひとりがここに深く刻むために、30 秒から 1 分間の沈黙の祈り間に入れながらグループ全員の発言を聞きます。

沈黙と祈り：全員の発言を聞き終えたのち、数分間の沈黙の祈りをします。ここでは、グループの一人ひとりの語りを聞く中で心に浮かび上がったこと、その中でもっとも響いたこと、もっとも抵抗を感じたこと、大きな課題と感じたことや霊が働いていると感じたことについて、祈りのうちに思い巡らします。



第2 ステップ：「あなた (You)」

他者と神にスペースを開く：グループのメンバーは第1ステップで聞いたこと、そして、沈黙の祈りのうちに思い巡らしたことを分かち合います。その際に、第1ステップで自分が発言しきれなかったことを追加で話してはなりません。グループの一人ひとりから聞いたものを祈りのうちに思い巡らす中で、自分のところに浮かび上がったものを発言します。

第1ステップ同様、相手に敬意を表しながら相手の話を聞き、各自もしくは数名が分かち合ったのち、30秒から1分間の沈黙の祈りをはさみながらグループ全員の発言を聞きます。

尊重：もし、意見がまったく異なっていたら、第1ステップで聞いたことがらに賛成していないと、相手を尊重しながら発言することができます。ただし、異なる意見を攻撃する、あるいは自分の意見に賛同させるような発言をしてはなりません。

質問の時間：グループのメンバーすべてが発言し終わってから、もし、内容について確認したい点や情報として明確にしておきたい点などがあつたとすれば、時間を設けて質問をすることはできます。しかし、発言の時間制限と沈黙の祈りはグループ内で大切に守られなければなりません。

沈黙と祈り：グループのメンバーがすべて発言し終わってから、再び沈黙の祈りをします。ここでは「霊における会話」の成果を見極めるために、第2ステップで各自の発言を聞く中で浮かび上がったことをふり返りながら、聖霊がどのように自分たちのグループを導いているかを明らかにしてもらえよう祈りをします。

第3 ステップ：「わたしたち (We)」：

ともに形づくって：聖霊の導きのもとに、グループとして浮かび上がった重要なポイントを明らかにして、その中で互いの分かち合いの内容において一致している部分を見いだします。それとともに、一致し難い部分や新たな発見も見いだしながら、これまでの共同作業を通して得られたものをグループでともに分かち合います。

声を響かせる：このときに大切なのは、この作業に自分の声が反映されている、とグループのメンバー一人ひとりが感じられることです。すなわち、グループのもれなくすべての人が



納得のいく形で、このセッションのまとめについて合意が得られることです。

新しい一歩へ：第3ステップは、グループのメンバーが同じ意見を持つという合意形成ではありません。お互いに「尊重しながらも賛成しない」部分、一致しがたい部分があることを確認する必要があります。そして、メンバーの誰もが自分の声が反映されていると感じられる共同作業をおこなうのです。こうして、新たな一歩を踏み出せるようになります。

感謝のための終わりの祈り：ともにいてくださった三位の神に感謝の祈りをグループで一緒にささげます。

グループ発表をおこなう場合：

第3ステップの分かち合いの後、発表をおこなう場合、発表を誰がおこなうのか、何を発表するのか等を話し合う、追加の時間が設けられます。

聖霊の働きを確認する：一人ひとりの分かち合いをまとめるのではなく、第1ステップ、第2ステップ、第3ステップを通して聖霊がどのように働いてくださり、どのように導いてくださったかを確認します。そのためにグループのメンバーで会話し、合意し、発表することになります。

思いがけない導き：第1ステップから第3ステップまで、聖霊を主役にして神の望みは何であるかを探し求めながら、グループの他の人たちの意見を、敬意をもって聞いていると、しばしば予期しない導きがあることに気づかされます。第1会期のための『討議要綱』33項には、次のように書いてある点に注目してください。

*「具体的な行動を指し示す、正確で、
しばしば予期せぬ方向へ向かう一歩がなければ、
それは霊における会話ではありません」。*

こころの動きに誠実に：もし、最初から最後まで何のこころの動きも変化もなく、抽象的な事柄に終始しているようであれば、それは「霊における会話」とは言い難いでしょう。「霊における会話」は、なにかしらの動き、それも具体的な動きを促してくれるのです。

チャレンジ：その意味で、聖霊はわたしたちに自分たちの快適な場所(コンフォートゾーン)



から離れ、柔和なところで、変化を恐れずに、不安定さの中で、信頼して新たな一歩を歩むよう招いているのです。

まとめ

「霊における会話」の方法はすべての人に開かれたものです。特定の人のもではありません。この手法によって、平等に発言する機会と、こころ静かに相手の話を聞く機会が与えられています。高位聖職者である枢機卿、大司教、司教、そして聖職者である司祭、助祭、教会で預言的な働きをする奉献生活者と宣教者、教会の主人公である信徒、さらには他教会の人々、他宗教の人々、男性であれ女性であれ、高齢者であれ青年や子どもたちであれ、皆が同じテーマ、同じ時間を与えられ、同じテーブルで交わりながら分かち合うことができる。これが「霊における会話」のすばらしさなのです。

このように教会内のさまざまな立場の人が同じテーブルで分かち合うことは、これまでほとんどなかったと思います。そのため、お互いが理解し合えず、お互いに傷ついていることもあったと思います。この方法を実践しながら、実際に教会のさまざまな現場に取り入れることによって、少しずつ「ともに歩む（シノドス的）教会」になっていくのです。

「霊における会話」はわたしたちに、自分の目の前にいる人の話に敬意をもって「聞く」と、自分も発言し最後まで話を聞いてもらうこと、たとえ意見が異なっても「尊重しながら賛成しない」やり方を学ぶことを教えてくれていると思います。また、沈黙のうちに思い巡らす時間を設けることによって、自分の考えや感情について立ち止まる時間が与えられ、そして相手のことも考える時間が与えられ、ある種の「アンガーマネジメント」の効果もあるように思います。これはカトリック信者のみならず、わたしたちが人として本質的に大切な生き方、人との関わり方のように思います。

霊における会話

シノドス的教会における識別のダイナミズム

